

柿色の紙風船

海野十三

青空文庫

「おや、ここに寝ていた患者さんは？」

と林檎りんごのように血けつしよく色のいい看護婦が叫んだ。彼女の突つつ立たっている前には、一つの空ベットツぼの寝台があった。

「ねえ、あんた。知らない？」

彼女は、手てぢか近かに居あた青あおン膨ぶくれの看護婦に訊きいた。

「あーら、あたし知らないわよ」

といって編物の手を停めると、グシャグシャにシーツみだの乱みだれているその寝台の上を見た。

「あーら、本当だ。居いないわネ」

「ど、どこへ行いったんでしようネ」

「ご不ふじよう浄じようへ行いったんじゃないこと」

「ああ、ご不ふじよう浄じようへネ。そうかしら……でも変ね。この方、ご不ふじよう浄じようへ行いつちやいけないことになつてんのよ」

「まあどうして？」

「どうしてといつてネ、この方、つまり……あれなのよ、痔じが悪いんでしょ。それでラジ

ウムで灼やいているんですわ。判るでしょう。つまり肛門こうもんにラジウムを差し込んであるんだから、ご不浄へは行っちゃいけないのよ」

「治療中だからなのねエ」

「それもそうだけれどサ、もし用を足している間に、下に落ちてしまうと、あのラジウムは小さいから、どこへ行つたか解らなくなる虞おそれがあるでしょう」

「そうね。ラジウムで随ずいぶん分たか高価いんですよ」

「ええ。婦長さんが云つてたわ。あの鉛筆の芯しんほどの太さで僅わずか一センチほどの長さなのが、時価五六万円もするですつて。ああ大変、あれが無くなっちゃ大変だわ。あたし、ご不浄へ行つて探してみるわ。だけでもし万一見付からなかったら、あたし、どうしたらいいでしょうネ」

「そんなことよか、早く行つて探していらっしゃいよ」

「そうね。ああ、大変！」

林檎のように顔色の良かった看護婦も、俄にわかに青森産あおもりさんのそのように蒼味あおみを加えて、アタフタと室外へ出ていった。

だが彼女は、出ていったと思つたら、五分間と経たないうちに、もう引返して来た。引

返して来たというより、むしろ飛び込んで来たという方が当たっていた。その顔色と云えばまったく血の気もなく蒼褪めて――。

「ああーら、どこにもあの人、居ないわ。あたし、どうしましよう。ああーッ」

彼女は、藻^{もぬ}抜^ぬけの殻^{から}の寝台の上に身を投げかけると、あたり憚^{はは}らずオンオン泣き出した。その奇妙な泣き声に駭^{おどろ}いて、婦長が駆けつけてくる。朋^{ほう}輩^{ばい}が寄ってくる。はては医局^{いきよく}の扉^{ドア}が開いて医局長以下が、白い手術着をヒラつかせて、

「なんだなんだ」

「どうしたどうした」

と、泣き声のする見^{けん}当^{とう}に繰^くり出^だしてきた。

それからの病院内の騒ぎについては、説明するまでもあるまい。なにしろ時価三万五千円のラジウムを肛門^{はな}に挿^さんだ患者が行方不明になったというのである。患者のことは兎^とに角^{かく}、ラジウムはどつかそこら辺の廊下^{らうか}にでも落ちていまいかというので、用務員は勿論、看護婦までが総出で探しまわった。

「無い……」

「どうも見つからん」

「困ったわねエ。でも探すものが、あまり小さすぎるのだわ」

そのうちに廊下に大きな掲示が貼り出された。「懸賞」と赤インキで二重丸をうった見出しで、「ラジウムを発見したる者には、金五百円也を呈上するものなり」と、墨痕あぎやかに認めてあつた。この掲示が出て騒ぎは一段と大きくなった。

だが結局、判らぬものは遂に判らなかつた。五百円懸賞の偉力をもつてしても、ラジウムは出て来なかつた。なにしろ太さといえは鉛筆の芯ぐらいで、長さは僅か一センチほどというのであるから、廊下に落ちれば、風に吹きとばされるであらうし、便所の中に落ちてサアと流れ出せば、なおさら判らなくなるだらうし、ことに患者の体内に入ったままとすれば、患者がどこへ行つたかが判らなければ駄目だつた。

病院の一室では、責任者たちの緊急会議が開かれた。結局原因は、ラジウムを盗むつもりでやつて来たのだからという説が有力だつたが、婦長の如きは、患者が識らずに三十分以上もあのラジウムを肛門に入れて置くと、ラジウムのために肛門の辺がとりかえしのつかぬ程腐つて遂には一命に係るだらうなどと心配した。しかし誰が盗んでいったか、そいつばかりは誰にも判らなかつた。

——と云う事件について、今も尚みなさんは多少の記憶を持っていられないだらうか。

あの「ラジウム入り患者の失踪事件」というのが、新聞に報道されたのは、もう今から五年あまり昔のことだった。

あの事件に興味を持つて、その後の記事を楽しみになすった方もあつたらうが、そういう方はきつと失望せられたに違いない。なぜなれば、あれから後、あの患者が逮捕されたという話も無ければ、用務員さんがラジウムを発見して五百円貰つたという記事も出なかつたからである。あの事件の報道は、あれっきりのことで、杳ようとして後日物語がうち断たれてある有様だった。

五年あまり後の今日――

ここに図はからずも、あの「ラジウム入り患者の失しつ踪そう事件」の真相と、その後日物語を発表する機会を与えられたことを、みなさんに感謝する次第である。

さてあの時価金三万五千元也のラジウムはどうしたか。それから、あのラジウム入りの患者はどうなつたか。

患者の方については、なによりもまず安心せられたい。あの思いやりのある婦長さんや、新聞記者君が心配して下すつたことは、遂に杞憂きゆうに終つたのであるから。つまりあの患者

は、ラジウムに生命いのちを取られることなしに、うまく助かったのである。そして今もピンピンしている。ピンピンしているどころか、こうして原稿用紙に向ってペンを動かしているのである。

あの失踪した患者というのは、実は斯じつかいうそれがしなのである。本名を名乗ってもいい。丸田丸四郎——これが私の本名である。

こう名乗ってしまうと、まず真まっさき先に訊きかれるだろうと思うことは、

「どうしてお前は、病院のベッドから居なくなつたのだ」ということだろう。

これについては、正直に次のように答えたい。「そいつは予かねての順序だつたのだ……」予ての順序だつたのだ。つまりラジウムを挿そうにゆう入されて、ほんのすこしだけけれど、じつと寝かされるのを待つていたのだ。医師と看護婦とは、私が寝台ベッドの上に釘くぎづけになつているだろうことを信じて疑わなかつた。

「動かないで下さい。ちよつとの間ですから」

と医師は私に云つた。そして看護婦の方を向いて、

「いいかね。二十分だよ。……僕は医局にいるからネ」

「はア。——」

そして医師が向うへ行つてしまふと間もなく看護婦は私に云つた。

「動かないで下さい。ちよつとの間ですから。——」

そういつて彼女は、林檎のような頬に、千恵蔵氏ちえぞうのついている映画雑誌を懐なつかしくてたまらぬという風に押しあて、そして向うへパタパタと行つてしまった。多分その千恵蔵氏を残念ながら誰かに返す時間が来ていたのであろう。

そこで私は、たいへん自然に、ベッドから起き上つて脱出する機会を攫つかんだ。近所には別の青あお膨ふくれの看護婦が、しきりに編物をしていたが、彼女は編物趣味の時間を楽しんでゐるわけであつて、管轄かんかつちがいのベッドに寝ている私の立居たちい振舞ふるまいについては、まったく無関心だつた。だから私は実に威風堂々と、あの部屋を脱出していった。

私は直ぐに便所へ行つた。

鍵をしつかりおろすと、私はかねて勝手を知つたる身体の一部を指先でまさぐつた。はたしてそこには、丈夫な二本の細い紐ひもの垂たれ下さがつてゐるのを探しあてた。

「ううーン」

と私は呼吸を凶はかりながら、指先でその紐をギュツギュツと引張つた。果して手応てごたえがあつた。やがてズルズルと出て来たのは小銃の弾丸のような細長い容器に入つたラジウムだ

った。私はそれを白紙はくしの上に取つて、ニヤリとほほえんだ。

「叩き売つても、まず……三万両は確かだろう」

私は白紙をクルクルと丸めると、着物の袂たもとに無造作に投げこんだ。そして嬉しさにワクワクする胸をおき圧えて、表玄関の人込みひとこみの中を首尾よく脱出したのだった。

こうして私の永く研究していたスポーツは、筋書どおりにうまく運んだのだった。これでも、末の見込みのない平事務員の足を洗つて、末は田舎へ引込むなりして悠々ゆうゆう自適じてきの生活ができるというものと、悦よろこびに慄ふるえた。

「ではお前は、あのラジウムを直ぐ処分したのかネ」と訊きかれるであろう。

直ぐ処分するということは、凡およそ泥棒と名のつく人間人間の誰でもやるであろうところの平々凡々の手だ。そして同時に拙せつ劣れつな手でもある。——私はそんな手は採用しなかった。

そこで私の第二段の計画にうつつた。それは、大変突飛とつな計画だった。私はその足で直ぐ日本橋の某百貨店へ行つた。その貴金属売場へゆくと、誰にも発見されるような万引をやつた。果して私は逮捕せられてしまった。それでいいのだつた。

なぜなれば、即そく日じつから、身体からだの自由を失つたと云うことは、即日そくじつから、私は警察の保護をうけたことになるのだ。

常習万引の罪状はきわめて明白だった。予審が済むと、私の身柄は直ちに近郊の刑務所に移された。やがて判決言渡があつた。

「被告ヲ懲役五年ニ処ス！」

私は晴れて刑務所の人間になつた。私は落ちつくところへ落着いて、たいへん安心したのだった。

その頃、世間では「ラジウム入り患者の失踪事件」のことなんか、もうすっかり忘れてしまつていた。病院の方でも、もう出ないものと諦めていた。警察では、真犯人の私のことを、あろうことかあるまいことか、常習万引罪で刑務所に封鎖してしまつたので、いくら巷を探したつて、犯人が網に懸る筈がなかつた。かくして例の事件は、盲点に巧みに隠蔽せられることとなつた。

それはそれで大変うまくいったのだが、唯一つ困つたことが出来た。

「なんか異状はないか」

と看守が、私の独房の窓から、室内を覗きこんだ。

「はア、困っていますんで……」

「困っている？ それは何か」

「痔でござんす。痛みますんで、夜もオチオチ睡れません」

「睡れないのは、誰でも入りたてはちと睡れぬものさ。痔だなんて、つまらん芝居をするなよ」

「芝居じゃありませんです。じゃそこで看守さんは見て居て下さい。いま此処で股引ももひきを脱いで、御覧に入れますから」

そういつて私は柿色の股引に手をかけた。

「ば、ば、馬鹿」と看守は慌あわてて吠どな鳴った。「おれが見ても判らん。上じょうしん申してやるから一両日待つとれツ」

ガチャンと窓に蓋ふたをして、看守は向うへ行つてしまった。

私は顔を響しかめながら、莫塵じごだけが敷いてある寝台の上にゴロリと横になった。

——思いかえしてみると、痔の悪くなるのも無理がなかった。あの病院へ行つていたころ、本当に悪かったのである。あれからこつち、汗をかくほどの活動を、それからそれへとした上に、ラジウムの隠しどころとして、あの肉ポケットを利用した時間が実に相当の量にのぼつたのだった。その結果、患部かんぶは悪化あつかした。いじりまわしたのが悪かったのか、それともラジウムを長い時間、患部に接して置いたのが悪かったのか。

そういえば、ハッキリ刑務所の人間となるときに、私は千番に一番のかね合いあという冒険をしたのだった。あのとき、私のあらゆる持ちものは没収ぼつしゅうされ、素ツ裸すばだかにして抛り出されたのだ。それまではラジウムを、あつちのポケットからこつちのポケットへと、頻ひん繁はんに出し入れしていた。同じところに永く入れて置くと、たとい洋服だの襯衣シャツだのを透とおしてでも、ラジウムの近くにある皮膚にラジウム灼けやを生しょうずるからだ。ところが、この素ツ裸にされ、そしてやがて襟えりに番号の入った柿色かきいろの制服を与えられる場合になつては、最早もはやラジウムはそのままにして置けなかつた。洋服の一部分に入れて置けばよいようなものであるが、五年も同じところに入れて置くと、洋服の生地がボロボロになり、その隙間すきまからラジウムは自然に下に転がり落ちるだろうと考えられたからだ。釦ボタンに穴を明けて置いて、その中にラジウムを嵌めはこむ方法も考えたが、ラジウムの偉力いりよくは、洋服の生地きじも馬蹄ばていで作つくった釦も、これをボロボロにすることは、まったく同じことだつた。——結局、柿色の制服を着る際には、どうしてもラジウムを、あの肉ポケットに入れて、うまく独房どくぼうの中へ持ち込むより外に、いい手はなかつた。

こんな風で、私の肉ポケットの疾患しつかんは、更に悪化したのだつた。ラジウムも適當なる時間を限つて患部に当てれば、吃驚びっくりするほど治癒ちゆが早いが、度を過ごすと飛んだことに

なるのだった。

「おい一九九四号、出てこい」

「はア。——」

「医務室へ連れてゆくから出て来い」

「はア。——」

私はラジウムを、清掃用の箒のモジヤモジヤした中に隠してそれから看守に連れられて外に出た。

（おオ、おオ）

と向いの一二三二号が小窓から顔を出して、私にサインを送った。彼はこの刑務所へ入つて出来た最初の友達であり先輩だった。本名は五十嵐庄吉といい、罪状は揃摸だとのことだった。

さて私は、その日から、痔の治療をうけることになった。何かにつけ、娑婆とは段違いに惨めな所内ではあるが、医務室だけは浮世並みだった。

「少し痛い、辛抱しろよ」

と医務長は云った。なるほど手術は痛くて、蚕豆のような涙がポロポロと出た。

独房へ帰つて来ても、痛くて起上れなかった。このままでは、腰が抜けてしまうのではないかと思つた。私はそのとき、ほうき 箒の中に隠してあるラジウムを思い出した。私は朝と夜との二回、ラジウムを取り出して患部にあてた。そして毎日それを繰返した。

「どうだ、びっくり 吃驚するほど、早くよくなつたじゃないか」

と医務長は得意の鼻をうごめかせて云つた。

「へーい」

私は感謝をしてみせたが、はら 肚の中ではフンと笑つた。医務長の腕がいいのではない。私のやっているラジウム療法がいいのだ。——こんなわけで、痔の方は間もなく癒なおつてしまつた。

それからは、まことに単調な日が続いた。

初めのうちは、刑務所ほど平和な、そして気楽な棲家すみかはないと思つて悦よろこんでいた。しかし何から何まで単調な所内の生活に、遂ついに愛あい想そうをつかしてしまつた。

尤も、私達は手を束つかねて遊んでゐるわけではない。私達の一団は、紙風船かみふうせんを貼はつているのである。広い土間どまの上に、薄い板が張つてあつて、その一隅いちぐうに、この風船作業が四組固まつて毎日のように、風船を貼つてゐるのだつた。それは刑務所の中での一番華はなやかな

手仕事だった。赤と青と黄、それから紫に桃色に水色に緑というような強烈な色彩の蠟紙が、あたりに散ばっていた。何のことはない、陽春四月頃の花壇の中に坐つたよ
うな光景だった。向うの隅で、麻の糸つなぎをやっている囚人たちは、絶えず視線をチラ
リチラリと紙風船の作業場へ送つて、快い昂奮を貪るのであつた。

風船をつくるには、色とりどりの蠟紙の全紙を、まずそれぞれの大きさに随つて、長い
花びらのように切り、それを積み重ねておく。それから小さいオブラートのような円形
を切り抜いて積み重ねる。これは風船の、呼吸を吹きこむところと、その反対のお尻の
ところとの両方に貼る尻あて紙である。呼吸を吹きこむ方の中には、小さい穴を明けて置く、
これだけが風船の材料であるが、それを豊富にとりそろえて置く。

紙風船の作業は、一番初めに、あの花びらのような材料の組み合わせを作る。たとえば
赤と黄との二色を、一つ置きに張つた風船をつくるのであると、そのような二種の花びら
を揃える。それから一枚一枚、すこしずつ外して並べ、ゴム糊を塗る。それが一役。

次へ廻ると、ゴム糊の乾かぬほどの速度で、その花びらを一つ置きに張つてゆく。する
と台のない提灯のようなものが出来る。これが一役で、四五人でやる。

今度はその乾いた分から取つて、半分に折り、丁度お椀のような形にする。これも

一役。

次は私と五十嵐庄吉とのやっている作業であるが、二人の間に、張はり型のフットボールの球に足をつけたようなものが置いてある。まず五十嵐の方が、二つに折られて来た紙風船をとつて、いきなりこのフットボールの上にパツと被せる。すると私は、オブラートに糊のりをつけたものを持つていて、その風船の肛門こうもんのようなどころへ円い色紙をペタリと貼りつける。すると間髪かんぱつを入れず、五十嵐の方が風船をフットボールから外はずすと、素早くお椀わんみたいなのを裏返しにして、もう一度フットボールの上に載せる、すると反対の側の風船の肛門が出てくるから、私は小さい穴のあいている方のオブラートをペタリと貼るのである。それで紙風船の作業は終つた。

あとは五十嵐が、出来上つた紙風船を、お椀わんを積むように、ドンドン積み重ねてゆく。すると、ときどき検査係が廻まわつて来て、その風船の山を向うへ搬はこんでいってしまう。

私と五十嵐とは、うまく呼吸いきを合あわせて、

「はッ、——」ポーン。

「いやア。——」ポーン。

と、まるで鼓つづみを打っているように、紙風船の肛門を貼ってゆくのであつた。——だがこ

んな仕事は、せいぜい一と月もやれば、いやになるものだった。

しかし月日の経つのは早いもので、そのうちに刑務所のお正月を、とうとう五度、迎えてしまった。やがて二月が来れば、いよいよ娑婆しやばの人になれることとなった。その後、あのラジウムは遂ついに怪あやしまれることもなく、私の独房ぼうきの箒ほうきの中に、五年の歳月を送ったのだ。私に新たな希望の光がだんだんと明るく燃えだした。私は暮夜ぼや、あの鉛筆しんの芯しんほどのラジウムを掌てのひらの上に転がしては、紅い灯のつく裏街の風景などを胸に描いていた。

ところが出獄しゅつごくも、もうあと三週間に迫ったという一月二十五日のこと、私の独房に、思いがけない二人の来訪者があった。

「オイ、一九九四号、起きてるか。——」
看守の後から背広姿の二人の訪客が入って来た。私は保釈ほしやく出獄の使者だろうと直感した。

(オヤ) 私は心の中で訝いぶかった。二人の客のうちの一人は、見知り越しの医務長だった。もう一人は、日焼けのした背の高いスポーツマンのような男だった。

「この男ですよ。入ったときは、実にひどい痔なほでした、ところが私の例の治療法で、予期しないほど早く癒なほってしまいました」

「はア、はア」

「どうか何などお話下さい。あとでこの男の患部を御覧に入れましょう」

「いや、それには及びません。ただ、すこし話をして見たいです」

「それはどうぞ御自由に……」

その見馴れぬ紳士は、私の痔病について、いろいろと質問を發した。私はそれについて淀みなく返事をすることに勉めた。しかしあの病院のことだけは言わなかった。

紳士は大した質問もせず、医務長と共に引上げていった。

そのあとで私はガツカリして、便器の上に蓋をして作つてある椅子の上に腰を下した。

(どうも変だナ)

紳士は一見医師としか見えぬ質問をしていたが、どうも医師くさいところに欠けているような気がした。疵を持つ脛には、それがピーンと響いたのだった。

(探偵かしら……)

にわかおのの不安に私の胸は戦きはじめた。

(これアいかん)

私は真先に、ラジウムの処分問題を考えた。この調子では、私の肉ポケットに入れて出

ることは、明かに危険であると感じた。きつと出獄の前に、いまの二人が私の肉ポケットを点検するだろう。そのときこそ百年目に違いない。——私は至急に別なラジウムの隠し場所を考え出さねばならなかった。

「オイ丸田」と作業場で声をかけたのは五十嵐だった。

「昨夜は大したお客さまだったナ」

「うん」

「あの若い方を知っているかネ」

「背の高い男のことだろう。——知らない」

「知らない？ はッはッはッ。馬鹿だなアお前は。あれは帆村ほむらという探偵だぜ」

「探偵？ やつぱりそうか」

「どうだ思い当ることがあろうがナ」

「うん。——いいや、無い」

「う、嘘をつけ。おれが力になってやる。手前てめえの仕事のうちで、まだ警察に知れていないのがあるネ」

「いいや、何にも無い！」

私はいつになく、この無二の親友の好意を斥けたのだった。いくら五ヶ年の親友だって、こればかりは打ち明けかねるといふものだ。

それから私たちは、無言の裡に仕事をやった。それは私たちにとつて珍らしいことだった。二人はこの仕事の間に、たとえ話がないにしろ、軽い憎れ口や懸声などをかけて仕事をするのが例だったから。

黙っているお蔭で、遂に私は素晴らしいことを発見した。それはあのラジウムを、安全に獄外へ搬び出す工夫だった。まず大丈夫うまく行くと思われ一つの思い付きだった。

その日、昼食が済んで、囚人たちは一旦各自の監房へ入れられ、暫くの休息を与えられた。やがて鐘の音と共に、またゾロゾロと列を組んで、作業場に入つていった。そのとき私は、あのラジウムを裸のまままで持ち出した。それは柿色の制服の、腰のところにある縫い目に入れて置いた。

作業場へ入ると、私は一同に準備を命じた。私は組長だったから、作業の初めにあたつて、一同の面倒を見てやるため、あつちへいったり、こつちへ来たりすることが許されていた。

「オイ、材料を見せろ」

と私は痩せギスの青年に云つた。

「へえ、これだけ出来ています」

私はその紙風船の花びらの束を解いて、パラパラと引繰りかえしていたが、

「おい、一枚足りないぞ」

「え？」

「ナニ、いいよいいよ」と私は云いながら、隅っこに駄目な花びらが乱雑にまるめてあるところへ寄つた。そして中から、一枚の柿色の花びらを取つた。「こいつを入れとこう」

「それは駄目です」

柿色の花びらというのは、実は不合格にすべきものだった。それは蠟紙ろうがみの黄の上に、間違つて桃色が二重じゆうずり刷すりになつたものだった。これは二色が重なつて、柿色という思いもかけぬ色紙になつた。元来すこし位、色が変わつても、子供の玩具おもちゃのことだからいいことになつているのだが、柿色という色は囚人の制服と同じ色であるところから、われわれ囚人の方で厭がつてハネることにしているのであつた、それは看守も大目に見ていたのだつた。

「なアに、一枚だけだ。これでいいよ。あとは捨てる。この屑山くずやまを直ぐ捨てて来い」

そういうなり私は、柿色の花びらを一枚束の中に加えた。一枚ぐらい余分に加わっても別に作業に不都合はなかった。

それが済むと、私は自分の作業台のところへ帰って来た。そこには五十嵐が何喰わぬ顔で待っていた。

作業は始まった。

私は柿色の花びらのついた紙風船が、もう来るか来るかと、首を長くして待った。

(あ、来たぞ) 柿色の紙風船は、遂に私たちの方に廻って来た。五十嵐は無造作に二つに折って、バサリと球たまの上に被せた。

「やあ」ポーン。

と私は丸い風船の尻あてを貼りつけた。だがそこに千番に一番のかねあい……というほどでもないが、糊のついたところに例の裸のラジウムをくつつけるが早いか、その方を下にしてポーンと柿色の紙風船に貼りつけたのであった、つまり鉛筆の芯しんの折れほどのラジウムは、紙風船の花びらと尻あてとの紙の間に巧みに貼り込まれてしまったのだった。

「いやア。——」ポーン。

五十嵐は同じ調子で、そのラジウム入りの風船をひっくりかえした。私はチラリと彼の

顔を見たが、彼は口をだらしく開いて、眼は睡む^ねそうに半開^{はんかい}になっていた。彼は私の大それた計画に爪ほども気がついていないらしかった。私は大安心をして、ポーンと丸い色紙を貼りつけたのだった。五十嵐はその柿色の紙風船に見向きもせず、腕をサツと横に伸ばして今まで出来た紙風船の上に積みかさねた。そこへお詠^{あつら}え向きに検査係が来て、その一と山の紙風船を向うへ持つていった。私はうまくいったと心中躍りあがらんばかりに喜び、ホツと溜息をもらした。

こうしてラジウムは、柿色の紙風船の中に入ったまま、私の手を離れていったのだった。それから後の話は別にするほどのこともない。私は予定より二週間ばかり早く、刑務所を出された。出るときは、果^{はた}してあの帆村とかいう探偵立合いの下に、肉ポケツトの中を入念に調べられたが、それは彼等を失望させるに役立ったばかりだった。私が出所したあとで、私の囚人服や独房内が、大勢の看守の手で大騒ぎをして取調べられていることだろうと思つて、噴^ふき出^だしたくなつた。

娑婆^{ふかぶか}の風は実にいいものだった。ピューツと空^{から}ツ風が吹いて来ると、オーヴァーの襟^{えり}を深^{ふかぶか}々と立てた。

「ああ、寒い」

風が寒いのを感^{かん}じるなんて、何^{なに}という幸福なことだろう。私は五年間に貰^{もら}いためた労^{ろう}役^{やく}の賃^せ金の入^いった状^{じょう}袋^{ぶくろ}をしつかりと握^{にぎ}りながら、物^{もの}珍^{めづ}らしげに、四^あ辺^{たり}を見廻^{みまわ}したのだ^{のだ}った。

そこへ一台の円^{えん}タクが来^きた。呼^よびとめて、車^{くるま}を浅^あ草^{くさ}へ走^はらせる。円^{えん}タクに乗^のるのも、あれ以^も来^こだ^だった。私^{わたし}は手^てを内^{うち}懐^{ぶくろ}へ入^いれて、状^{じょう}袋^{ぶくろ}の中^{なか}から五十^ご銭^{せん}玉^{ぎよく}を裸^{はだか}のまま取^とり出^だした。

「旦那、浅^あ草^{くさ}はどこで^す」

「あ、浅^あ草^{くさ}の、そ^うだ浅^あ草^{くさ}橋^{はし}の近^き所^{ところ}でい^いよ」

「浅^あ草^{くさ}橋^{はし}ならすこし行^いき過^すぎまし^たよ」

「いや、近^きくなら^ばどこでもい^いい。降^おろして呉^{くれ}れ」

私^{わたし}は綺^き麗^{れい}な鋪^ほ道^{どう}の上^{うへ}に下^{くだ}りた。だ^が何^{なに}となく刑^{けい}務^む所^{じょ}の仕^し事^じ場^ばを思^{おも}い出^ださせ^るよ^うなコンクリ^くートの路^じ面^{めん}だ^った。私^{わたし}は厭^{いや}な氣^きがし^た。

そこ^こで私^{わたし}は、トコトコ歩^あき出^でした。

訪^まねる先^{さき}は、七^{しち}軒^{けん}町^{ちょう}の玩^{おも}具^ぐ問^{もん}屋^や、丸^{まる}福^{ふく}商^{しょう}店^{てん}だ^った。あ^あつちへ行^いつたり、こ^こちへ行^いつたり、相^あ当^{たう}ま^まご^ごつ^ついた^が、や^やつと思^{おも}う店^{てん}を探^たしあ^てた。店^{てん}頭^{あたま}には賑^{にぎ}かに風^{かぜ}や羽^は根^ね

がぶら下り、セルロイドのラッパだの、サーベルだの、紙で拵こしらえた鉄てつかぶと兜かぶとだの、それからそれへと、さまざまなのが所も狭く、天井から下っていた。——私は臆おく面めんもなく、店先へ腰を下した。

「いらつしやいまし。何、あげます？」

と小僧さんが尋たずねた。

「ああ、紙風船が欲しいのですがネ、すこし注文があるので、一ついろいろ見せて下さい」「よろしゅうございます。——紙風船といいますが、こんなところで……」

と小僧さんは指さした。なんのことだ、私の坐った膝の前、あの懐しい紙風船が山と積まれているのだ。

（おお。——）

私の胸は早鐘のように鳴りだした。風船を両手でかき集め、しっかりとおき压おさえたい衝動に駆られた。だが私も、刑務所生活をして、いやにキョトキョトして来たものである。

「そうですネ。——」

と私は無理に気を落ち着けて、風船の山を上から下へと調べていった。

（柿色の風船は？）

無い、無い。無いことはないのだが……。およそ私の居た刑務所の紙風船は、一つのこと
 らずこの丸福商店に買われることになってきているのだ。それは刑務所で入札の結果、本
 年も紙風船は丸福に落ちていたのだった。だから柿色の紙風船は、この店にあるより外に、
 行く先がなかった。売れたのかしら？

「……もう風船はないのですか」

「唯今、これだけで……」

「そうですか。どこかにしまつてあるんじゃないですか」

「いいえ」

小僧さんは悲しいことを云つた。

私はガツカリして、立ち上る元気もなかった。そのとき奥から番頭らしいのが、声をか
 けた。

「吉松。さつき、あすこから来たのがあるじゃないか。あれを御覧に入れなさい」

「ああ、そうでしたネ。……少々お待ち下さい。今日入った分がございましたから」

「今日入ったのですか。ああ、そうですか」

私は悦びに飴のように崩れてくる顔の形を、どうすることも出来なかつた。小僧さんは、

大きいハトロン紙の包みをベリベリと剥いた。

「これは如何さまで……」

「ああ——。」

私は一目で、柿色の紙風船が重なっているとところを見付けた。

「あ、こいつはお誂え向きだ。こいつを買いきましょう。」

私は十円紙幣を抛り出して、沢山の風船を買った。小僧さんが包んでくれる間も、誰かが邪魔にやつて来ないかと、気が気じやなかった。だがそれは杞憂にすぎなかった。

私は風船の入った包みをぶら下げて、店を出た。ところが店の前を五六間行くか行かないところで、私はギョツとした。私の顔見知りの男が、向うから歩いて来るのである。それは帆村という探偵に違いなかった。

（これは——）と咄嗟に私は決心を固めたが、幸いにも帆村探偵は、並び並んだ玩具問屋の看板にばかり気をとられて歩いていられるらしかった。私はスルリと電柱の蔭に隠れて、とうとうこの間抜け探偵をやりすごした。

私はすぐに円タクを雇うと、両国へ走らせた。国技館前で降りて、横丁に入ってゆくと、幸楽館という円宿ホテルがあった。私はその扉を押した。

三階へ上り、部屋からお手伝いさんを追い出すのももどかしかった。宿泊料とチップを受けとって、ふくら雀すずめのようなお手伝いさんが出てゆくと、私は外套がいとうを脱ぎ、上衣うわぎを脱いだ。そして持つてきた包みをベリベリと剥がした。ナイフなんか使ういとま違がない。すべて爪の先で破った。

出て来た出て来た。

「柿色の紙風船だア！」

外ほかの紙風船は、室内にカーニヴァルの花吹雪はなふぶきのように散った。

「これだ、これだッ」

とうとう探しあてた柿色の紙風船だった。私の眼は感きわまって、俄にわかに曇った。その涙なみだを襯衣シヤツの袖で横なぐりにこすりながら、私は紙風船の丸い尻あてのところを指先で探った。

「オヤ？」

どうしたのだろう。尻あてのところに確かに手に触れなければならぬ硬いものが、どうしても触れないのだ。そこはスケートリンクのように平坦だった。

「そんな筈はない！」

怵こらえきれなくなった私は、尻あてに指先をかけると、ベリベリと引つべがした。すつかり裏をかえして調べてみた。ところが、やっぱり何も見当らない。これは尻あてと、呼吸いきを吹きこむ口紙の方と間違つたかナと思つて、今度はそちの方をひきむしつてみた。が、やっぱり無い。そんな筈はない。そんな筈はない。が、どうしても見当らないのだった。

「ああーッ」

私の腰はヘナヘナと床の上に崩れてしまった。夢ならば醒さめよと思つた。神様、もう冗談はよしましょうと叫んだ。時間よ、紙風船を破く前に帰れよと喚わめきたてた。だが、そんなことが何の役に立つというのだ。絶望、絶望、大絶望だった。数万の毛穴から、身体中のエネルギーが水蒸気のように放散ほうさんしてしまった。私は脱ぎ捨てられた着物のようになって、いつまでも床の上に倒たおれていた。

それはどれほど後だったかしらぬ。私はようやく気がついて、床の上に起き直つた。考えてみると、随分馬鹿な話だった。あれほどうまく隠しお寄せた三万五千円のラジウムが、とうとう行方不明になってしまったのだ。だが、あの日までは私の手のうちにあつたラジウムである。現在も地球上の、どっかに存在している筈はずであつた。

そう思うと又口惜し涙がポロポロ流れ落ちて来るのだった。人生の名誉を賭けたあのラジウムを、そんな簡単に簡単に失つてなるものかと歯ぎしり噛んだ。

「一体どこで失つたんだらう？」

私はあの日からのちのことをいろいろと思い綴つて見た。いろいろと考えられはしたが、結局すっかりしたことは判らない。しかし一旦糊で紙の間に入れたラジウムが、こんな短期に脱け落ちるのはおかしい。といつて風船が違つたわけでもない。この柿色の風船のように、半端な色花びらを接ぎ合わせたものは外にない筈だ。

私は同じことを、いくたびも繰り返し繰り返し考え直した。考え直しているうちに、ふと気がついたことがあつた！

「おお、あれかも知れない」

私はムクリと起き上つた。

「いや、あれに違いないぞ。うん、そうだ」

私の全身には、俄かに血潮の流れが早くなつた。手足がビリビリと慄えてきた。

「よよし、畜生……」

私は戸外の暗闇に走り出でた。

さてそれから後のことを、どう皆さんに伝えたらいいだろうか。私はすこし語りつかれたので、結末を簡単に述べようと思う。その結末というのは、恐らく、もう皆さんの目にハッキリと映っていることと思う。そういつて判らなければ、もつと明瞭めいりょうに云おう。

皆さんは、二月二十日付の朝刊を見られたであろうと思う。その社会面の中で、なにが皆さんを最も駭おどろかしたであろうか。

それは云うまでもあるまい。

「山麓さんろくの荒小屋あれこやに発見されたる怪屍体」という見出しで、「昨十九日午前八時、×大学生×は×山麓さんろくの荒れ小屋の中に於おいて休息せんとしたところ、凶はからずもその中に年齢四十二歳と推定される男の素裸の怪屍体を発見した。警報をうけて警視庁の大江山捜査課長以下は、鑑識課員を伴って現場げんじょうに急行した。現場には同人のものらしき和服と二重まわしが脱ぎ捨てられてあつたが、その外に何のため使用したか長い麻繩あさなわが遺棄いきされてあつた。その他に持ちものはない。屍体は即日解剖に附せられたが、この男の死因は主として飢餓きがによるものと判明した。尚屍体の特徴として、左肋骨ろつこつの下に、著いちじしい潰瘍いようの存することを発見した。しかしその成因せい其他いんそについては未詳みじょうであるが、とにかく

く兇行に關係のある重大なる謎として係官の注意を集めている。

後報。——被害者の身許が判明した。彼は五十嵐庄吉（三九）であつた。十日前に××刑務所を出獄した掬摸十二犯の悪漢である。彼は刑務所を出で、正門前に待ち合わせていた自動車に乗つたまま行方不明となつたもので、同人の家族から××署へ搜索願が出たものである。犯人はいまだ不明であるが、多分同人を恨んでいた者の復仇らしい見込みである。警視庁では同人を連れ去つた自動車と運転手を極力厳探中である云々」

五十嵐庄吉が惨殺され、しかも左肋骨の下に不可解の潰瘍の存することについて、皆さんは心当りが無いであらうか。

あいつは掬摸の名人だつた。私はそれをつい永い間忘れていた。いや私はもつと忘れていたことがあつたのだ。刑務所は学校と同じことに、立派な人間ばかりいて、立派な友情が溢れるほど存在しているものだとはかり誤解していたことだ。

私が風船にラジウムを入れたとき、五十嵐の奴はそれを裏返したが、そのとき遅く彼のとき早しで、彼は、小器用に指先を使って、ラジウムを掬りとつたに違いなかつた。

そのことについて今になつて気がついた私は、刑務所の門前で運転手に化けると、刑務

所の門前で出獄したばかりの彼をうまうまと誘拐したのだった。そしてあの荒れ小屋に連れこむと、身の自由を奪っているいろと折檻したが、強情な彼奴は、どうしても白状しなかった。私は怒りのあまり、遂に最後の手段を拵んだ。彼の身体をグルグルと麻縄で縛りあげると、ゴロリと床の上に転がした。そのまま幾日も抛って置いた。無論一滴の水も与えはしなかった。だから彼は遂に飢餓と寒さのために死んでしまったのだった。私は彼の身体の冷くなるのを待つて縄を解いた。そして素裸にすると全身を改めた。そのときあの左肋骨下の潰瘍を発見したのだった。

「そうら見る。貴様がラジウムの在所を喋らずとも、貴様の身体がハッキリ喋っているではないか。ざまア見やがれ」

私は早速彼の左のポケットの底を探つて、とうとう目的のラジウムを引張り出したのだった。無論彼が白状せずともこのラジウムの力で、彼の身体の上に遠からずして潰瘍が現われるだろうことを私は初手から勘定に入れていたのだった。

だが私も話らんことから人殺しをしてみました。今は後悔している。あのラジウムは、未だにそのまま持っている。それを金に換えるためと、そして私の新しい世界を求めるため、今夜私は日本を去ろうとしている。多分永遠に日本には帰って来ないだろう。私はあ

れを金に換えた上で、赤い太陽の下に、花畑でも作って、あとの半生をノンビリと暮らすつもりである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1934（昭和9）年2月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柿色の紙風船

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>